

リンドレー・ウィリアムズ・ハブル・林秋石

Lindley Williams Hubbell Hayashi Shuseki

-人と作品-

The Man and his Works

第八章

シェイクスピア史劇

Shakespeare's Histories

尾崎 寔

OZAKI Makoto

Abstract: Hubbell places the chapter of Shakespeare's Histories at the end of his book, whereas *the First Folio* of 1623 put them between comedies and tragedies. Hubbell started to teach Japanese students at Doshisha University in April 1954, and he must have noticed by the time he published *Lectures on Shakespeare* (1960) how difficult it was for the Japanese ears to catch the sound, music and beauty of Shakespeare's dramatic language. The most obvious difference between actual histories of England and Shakespeare's Histories is that the former were generally written in prose, and the latter in verse. This, however, cannot be the reason for his placement. He never hesitated to give students the best of his knowledge and understanding, however deep they might be. The last of the 14 lectures on Histories consists of 65 pages of his comments on 10 plays, and each one of his other 13 lectures is less than an average of 15 pages in length.

Keywords: Hubbell, Shuseki Hayashi, *Shakespeare's Histories*, *the First Folio*, reality vs. fiction, prose vs. verse, ハブル、林秋石、第一二折版、シェイクスピア史劇、英国史、『ジョン王』、『ヘンリー八世』、史実と虚構、歴史とドラマ、散文と韻文

第十四章 ハブルによるシェイクスピア史劇講について

英語圏以外で、日本ほどシェイクスピアが愛読され、上演される国はないといわれる。そのとおりだろう。しかしその日本でもシェイクスピアの書いた史劇のすべてが

商業劇団はおろか、採算を度外視した学校演劇によってすら上演されたということは聞かない。英国の歴史に魅力は感じて、知識や理解を深められずにいる日本の観客にとって、複雑に入り組んだ筋書は、区別しにくい登場人物名とあいまって、喜劇や悲劇のように愛憎、野心、欲望など、人類共通のテーマに立って展開する作品と同じように楽しめないのはたしかである。史劇といえば、『ヘンリー四世』一部、二部、『リチャード二世』、『リチャード三世』、『ヘンリー五世』など、国家主義称揚のプロパガンダという意味合いも含め、ことあるごとに表舞台に出てくる作品をのぞけば、本場英国ですら稀にしか省みられることのない作品群とっていい。

ちなみに1997年、ロンドンのテムズ河南岸に再建されたシェイクスピアのグローブ座オープニングの祭典は、エリザベス女王、フィリップ殿下を迎えて盛大に繰りひろげられたが、その中心となったのは他でもない『ヘンリー五世』であった。タイトル・ロールを演じたのは、再建グローブ座創立者サム・ワナメーカーの申し子ともいべきマーク・ライランスだったが、プロローグはサムの娘で女優のゾーイ・ワナメーカーが登場して高らかに謳いあげ、1994年秋、完成を目前に世を去った父親に対するこの上ないはなむけとなった。今も舞台のゾーイ、それを貴賓席から見下ろしている女王夫妻の写真を見ると、その瞬間の劇場のどよめき、興奮が蘇ってくる。

本題に戻ろう。1953年秋、来日して半年もたらずに日本の大学でシェイクスピアを講じることになったハブルが、そのような日本での受容の実態を知り、いわば付録のように著作の末尾でまとめて論じたのか。それとも10作全部を一つの有機体として、解説するには分量的にも最後におくべきだという至極現実的な考えによるものか。答えがこの二つのうち一つというのであれば、明らかに後者であろう。だが、この章を読み終えれば、もう一つの答えが浮かび上がってくる。ハブルの特徴がもっともよく発揮されている章であるということとあわせて見ていこう。

事実と虚構、現実の歴史と歴史にもとづいて書かれた物語。物語や劇など、いわゆるフィクションであっても、現実の歴史を無視して向きあうわけにはいかない。読者、観客の側からすれば、往々にしてその両者の混同が行われるし、それはまた文学が確保してくれる楽しみであり、自由でもある。その意味で筆者ハブルは、他の追随を許さない有利さを持っている。史劇だけではないが、この10篇の作品全体が彼自身の血となり、肉となって彼のうちにあるのだ。加えて彼はアメリカ人とはいえ、すでに述べたように、すぐれて西欧的な文化に幼時からどっぷりと身を浸して成長した。英国史はその一端という以上に自分の誇らしいルーツとして受け入れている。それは、政

治的な色付けや宗教的偏向を排しながら、歴史物語としてのシェイクスピア史劇を語る上で単なる知識の積み重ねという以上の有利な働きをしていることが明らかである。

その上でなお、ハブルが優れた詩人であることを見逃すわけにはいかない。彼はシェイクスピア史劇について、しばしば作品の持つ韻文としての特徴や音楽性に触れる。英国史とシェイクスピア史劇のもっとも大きな違いは、前者が散文そのものであるのに対し、後者は韻文であるということ、その当然のことが日本ではほとんど見逃される。読むにしろ、観るにしろ、もっぱら日本語訳だからである。苦心して日本語の韻文に置きかえてみても、英語本来の韻律とは当然似ても似つかぬものである。したがってハブルが伝えたかった詩としてのシェイクスピア史劇の特徴を明らかにするためには、原文の引用しかないことになる。本文（日本語訳）と重複するが、その例を見て本稿の結びとしよう。ハブルは『ジョン王』から史劇全体をつらぬくテーマとして、終幕における **Bastard** の言葉を引用している。

Come the three corners of the world in arms,
And we shall shock them. Naught shall make us rue
If England to itself do rest but true.

全世界が三方から武器を手に襲ってくるなら来るがいい、
震え上がらせてやる。何の悲しみがあろうか、
イングランドがおのれ自身に対して忠実であるかぎり。

もう一つは、ハブルがその音楽性を賞賛する『ヘンリー五世』の科白である。

Small time; but in that small, most greatly lived
This Star of England.

わずかばかりの時でありました。しかしその束の間に、
このイングランドの星はこの上なく偉大な生を生きられたのです。

シェイクスピア史劇―「シェイクスピア講義 第十四章」

シェイクスピアが書いた 10 本の英国史劇のなかで、中心をなす 8 作が「ダブル・テトラロジー」（二重四部作）を構成していることはあきらかだが、最初と最後の作品は普通、ほかのものとなんら意味のあるつながりを持たないと考えられている。しかし私には、この 2 作のおかれている位置、つまり一つは冒頭に、もう一つは長い歴史の流れの最後、というところに、思わせぶりのシンメトリーがあるように思える。書かれた順序は不同である。唯一これに匹敵する戯曲といえばワーグナーの『ニーベルンゲンの指輪』があるが、これは過去にさかのぼっていく形で書かれた。1877 年、ワーグナーがダンロイター¹ に語ったことを、後者がグローヴの『音楽と音楽家辞典』² に引用している。

私は『ジークフリートの死』のニーベルンゲン神話の最も重要な瞬間を脚色しようとしたとき、中心となる出来事に光を当てようと思えば、先行する膨大な歴史的事実を示さなければならないことに気づいた。でも私にできたのは、これらの副次的な事柄を「語る」ことだけだった―だが私にはそれらはなんとしても筋書きの中に組み込まれるべきものと思えたのだ。そうして『ジークフリート』を書くことになった。しかしここでも同じ困難が私を苦しめた。結局、私は『ワルキューレ』と『ラインゴールド』を書き、筋書を通じて物語自体を伝えるのに必要なことをすべて盛り込むよう、工夫したのだった。

シェイクスピアが一連の歴史劇を執筆するにあたっては、もっと複雑ではあるが、これとよく似た事情があったものと思われる。複数の著者云々の問題はこのさい脇におくとして、彼の最初の作品は『ヘンリー六世』三部作であるようだ。それから、喜劇、悲劇を試みたあと、彼は『リチャード三世』で四部作を完成した。しかし、ヘンリー七世となったリッチモンド伯の勝利で終わりを告げた長い悲劇的な出来事の連鎖は、ヘンリー六世の治世よりはるか以前に始まっていた。実際それは、リチャード二世を力づくで廃し、ヘレフォード公が王位についてヘンリー四世となるという明白きわまりない王位篡奪によって始まったのだ。そこで、おそらくは 2 年後、さらに喜劇をいくつか書いてから、シェイクスピアはリチャード二世廃位からリッチモンドの勝利にいたる一連の事件を仕上げるもう一

¹ Edward George Dannreuther, 1844 – 1905, ストラスブール生まれの独ピアノリスト、音楽理論。ライプチヒ音楽院で理論を学び英国に移り、ロンドンの王立音楽院教授。ヘイスティングズで没。

² *Groves Dictionary of Music and Musicians*: 英音楽学者 George Grove 1820 – 1900 が 1889 年に刊行した全 4 巻の音楽辞典。

つの四部作を書きはじめている。リッチモンドはエドワード四世の娘エリザベスと結婚、ヨーク家とランカスター家とをふたたび結びつけてバラ戦争を終結させる。しかし、この二つ目の四部作をスタートする前に、シェイクスピアは『ジョン王』を書いているのだ。この記念碑的なシリーズのプロローグというべき位置に、この作品がおかれていることに気づいたシェイクスピア批評家も何人かいた。G. G. ゲルビーヌス³ は *Commentaries*⁴ のなかで次のように述べている。

『ジョン王』は外見上二つの歴史四部作となんのつながりも見られないが、そこに含まれている考え方についていえば、シェイクスピアは歴史をめぐる概念と、ドラマそのものに見られる概念とを区別している政治的な観念にもとづいて作品を書いていることがわかるはずである。

D. J. Snider⁵ は著作 *System of Shakespeare's Dramas* (第2巻、286頁)で、『ジョン王』こそ、英国史劇全体の基調音を打ち出している。つまり国家主義である」と言っている。

一体なぜシェイクスピアは、ヨーク家とランカスター家の一連の劇のプロローグとして『ジョン王』を選んだのだろうか？ シリーズ最後の劇である『ヘンリー八世』は、ごく自然に第二四部作の結論に続いている。というのも、ヘンリー八世は、いうまでもなくヘンリー七世の息子なのだから。しかし、ジョン王と他の9作との間にそんなつながりはない。ジョン王は1216年に死に、リチャード二世は1399年に退位させられていて、最初の二つの劇の間には183年もの年月が流れている。ジョン王を選んだ理由は、彼がプランタジネット家最後の王であり、その死によってノルマンディ公によるイングランド支配に終止符が打たれたからではないだろうか。至極現実的な意味で、これが英国史の、今日私たちがいうところの「君主制、独立国家」のはじまりだったのだ。私たちはジョン王と大憲章を結びつけがちだが、エリザベス朝の人びとにとって同じような意味をもっていたわけではなかった。John Richard Green⁶ は、*A Short History of the English People (rev. ed., 1952, p. 128)* で次のように述べている。

私たちは、英国におけるこの最古の自由の記念碑を、自分の目で見、わが手で触れることができるのだが、そのときに深い敬意の念を持たずに見つめることなど出来はしない。それは時代を超えて愛国者たちが英国的自由のいしずえとして振り返りつけてきたものなのである。しかし大憲章そのものは、決して新しいものではなかった

³ Georg Gottfried Gervinus, 1805 – 1871. 文学史、政治史、独作家。

⁴ 'Shakespeare', 2 vols., 1872, *Eng. trans.* by FE Bunnnett, 1863.

⁵ Denton Jacques Snider, 1841–1925, 作家、教育者、文芸批評家。

⁶ John Richard Green, 1837–1883, 19世紀、英歴史家。

し、新しい憲法上の原則を打ちたてようというのでもない。ヘンリー一世の憲章が全体の基盤となっており、付け加えられたのは多くの場合、ヘンリー二世がもたらした司法上、行政上の変化を正式に追認したものである。

エリザベス朝人にとって、ジョン王はもっと大きく違った意味を持っている。C. J. Sisson⁷ がこの劇につけた序文で述べているように、

エリザベス朝の人びとがジョン王を尊敬するのは、カトリックに抵抗したからであり、バイル大司教の道徳史劇『ジョーン王』⁸ がジョンをプロテスタントのヒーローに仕立てたのだ... 彼の治世に対する現代の関心はマグナ・カルタに集中しているが、エリザベス朝の劇でこれを主な主題に据えることのできた作品はなかったはずだ。

だが、もしシェイクスピアが、ジョンからマグナ・カルタを力づくでもぎ取った(当時そんなことはだれも思いつきはしなかった)郷土たちを称えるこの劇を書いていなかったら、反カトリック宣伝の劇を書く気にならなかったことは明らかである。私は思うのだが、シェイクスピアの心中では、プランタジネット王朝の滅亡は、彼の存命中に栄光の極みに達した国、「近代英国」のはじまりだったのではないかと。『ジョン王』は次の言葉で終わる。

全世界が三方から武器を手に襲ってくるなら来るがいい、
震え上がらせてやる。何の悲しみもない、
イングランドがおのれ自身に対して忠実であるかぎり。

国家主義の主題を高らかに謳いあげるこれらの言葉は、このあとに続くイングランド史の壮大な祭列の開幕を告げるトランペットのようである。それはまたシリーズの中ほど『ヘンリー五世』で主題の究極の形へと発展し、「このイングランドの星」となるのだ。

シェイクスピアは『ジョン王』で、英国史の発端といってもいいような姿を描いているが、同様に『ヘンリー八世』では、物語を執筆した時代にもってきて、エリザベス女王とジェームズ一世(女王メアリーはうまく無言のうちにやりすごし)を登場させるために、クランマーの予言的な能力を引っ張り出しているのだ。このエピローグは、他の9作が名声を博してしばらくたった後に加えられたものである。『ヘンリー八世』が書かれたのは、おそらく『ヘンリー五世』が完成してから13年後のことだった。劇作家としての経歴の最後に偉大な悲劇、深遠なる作品を書いた後、シェイクスピアは、多分共作者とともに(もっともこの点に関して、学者たちは、以前ほど確信してはいないのだが)このエピローグ

⁷ Charles Jasper Sisson, 1885—1966, 英、文学者、ロンドン大学教授、シェイクスピアを中心とするエリザベス朝演劇の実証的研究家、古文書研究。

⁸ *Kyng Johan*, 『ジョーン王』。カルメル派の僧ジョン・バイルが1550年ごろに書いたとされる劇。13世紀、反カトリックをつらぬき暗殺される英国王ジョンを描いた劇。

を書き加え、ついにこの壮大な骨組みの全体像を完成させたのだ。シッソンがこの作品に付した序文(727頁)で言っているように、「ヘンリー八世の治世の物語は、シェイクスピアの長い歴史劇の論理的到達点であった。しかし、これはエリザベスの在位中には、まず上演されなかつただろうと思われる。」シェイクスピアがこれほど長い間、自分の立てた構想の完成を待ったのは、ただそうするしかなかつたということなのだろう。形式的にこの作品がほかの9作とまったく異なっているということは、演劇として見ればエピローグには実にふさわしく、とりわけこれほど長いシリーズの締めくくりとしては申し分ないものである。歴史の連なりを、栄光と優雅さをもってびたりと閉じているのだ。あり得ることだが、シェイクスピアがフレッチャーと共同で『血縁の二公子』を書いたのでなければ、これが彼の最後の作品なのだろう。つまりこの巨大な作品に取り組むことで作家としてのスタートを切り、また閉じることになったと言えるかもしれないのだ。

10作のうち8作からなるこの二重四部作は、二重のリズムをもっている。つまり二通りの読み方ができるし、そうすべきなのだ。年代にしたがって『リチャード二世』から『リチャード三世』へと歴史物語風に読んでいくと、積み重ねられていく効果は絶大である。リチャード二世の弱さとボリングブルックの裏切りから、シェイクスピアにとっては最大の悪である「地位」の侵害、「この世の天使ともいふべき尊敬の念」(『シンベリン』4幕2場)の排除にいたるのである。いったん悪が行われると、それは裏切りから裏切りへと枝分かれしていき、ついに私たちはリチャード三世の孤独な姿を目撃することになる。彼はボズワースの原野で亡霊に取りつかれて立ちつくし、恐るべきせりふを口にする。

絶望あるのみだ。俺を愛するものなどない。

俺が死んでも憐れむものは一人もいはいはしない。(5幕3場)

ところが、この二重四部作を、書かれた順序で読んでいっても、つまり、第二四部作を第一より先にとということだが、それでも積み重ねの効果は同じように強力で、ヘンリー六世劇の仮の幕開きから、『リチャード三世』の悲劇的な力のはじまりを通して、『リチャード二世』の練り上げられた抒情、『ヘンリー四世』の多様に織りあわされた豊かな多面性、さらには『ヘンリー五世』のとどろくような音楽を経て、壮大なエピローグへと結実するのである。

わずかばかりの時でありました。しかしその間に、
このイングランドの星、ヘンリー五世はこの上なく
偉大な生を生きられたのです。

これら二重四部作にみられる二つのリズムは、交差する円のようなものである。どちらも常に存在している。どんな順序で読んでも、両方のリズムを意識せずにはいられない。

こんなことは、これらに匹敵するようなどんな作品にも、見られないものである。『オレステス』、『ファウスト』、『ニーベルンゲンの指輪』、『皇帝とキリスト教徒』、『ダイナスツ』、どれをみてもリズムは一つである。このシェイクスピアの歴史の環にある二重のリズムは、その両端で閉じられている。つまり『ジョン王』のプロローグにある不吉な前兆、それはまるでヴェルディの『オテロ』の殺人に先立つ二重のベースのようだが、それと『ヘンリー八世』のエピローグ、そこにある清澄なひびきと、ある種の乾いた感じは、マッシンジャー⁹の筆が加わっているのではないかと疑うものが少なからずいたものである。最初の劇は主題となる題材を、最後のものは解決を含んでいる。その間に、栄光に次ぐ栄光が（音楽における）対位法的に繰りひろげられるのである。

【付記】2007年本誌第9号以来、8回にわたり拙稿を掲載していただいたことに対し会長上田邦義氏、事務局長菊池善太氏をはじめとする学会役員の方々にまず心より感謝申し上げます。ハブルによる原著は、史劇の項でも、このあと『ジョン王』から『ヘンリー八世』まで、10編の史劇について、短い注釈を加えている。結局本稿でこの部分を割愛したほか、全体でも『リア王』をはじめ、『アントニーとクレオパトラ』、『ペリクリーズ』、『コリオレイナス』、『間違いの喜劇』、『トロイラスとクレシダ』が残っている。原著の約半分を紹介できたに過ぎない。怠惰を嘆き、師ハブルだけでなく本誌の賢明で寛容な読者諸氏にも非力をお詫びするしかない。ここでいったん『融合文化研究』誌上での連載は終えることになるが、さらに加筆、訂正のうえ、単行本としてまとめる予定である。これまで貴重な資料の提供、教示、励ましを賜った大勢の方々への謝辞は、その場に譲らせていただくことにする。どうも長い間、ありがとございました。

⁹ Philip Massinger (1583 – 1640), 英劇作家。